

フレデリック・ダグラス研究の一断章

—ダグラスの出生年の確定をめぐる—

本 田 創 造

一

一八一七年頃のある日、メリランド州東海岸タルボット郡イーストンの北東十二マイルほどの距離にある、タッカホウとよばれた片田舎の農園で、ひとりの黒人が奴隷の子として生まれた。

母親はハリエット・ベイリーという名前の黒人奴隷で、母方の事情については多少のことはわかっているが、父方については父親の名前も素性も不明、噂によればかれの奴隷主だったともいわれている。

生まれてまもなく、フレデリック・オガスタス・ワシントン・ベイリー Frederick Augustus Washington Bailey

と名づけられたこの黒人奴隷、のちのフレデリック・ダグラス Frederick Douglass の生年月日を確定する問題についてはあとでふれるが、かれ自身は最後までそれを知らず、この世を去った。

「ほとんどの奴隷は、馬が自分の年齢を知らないのと同じように、自分の年齢を知らない。私の知るかぎり、このように奴隷を無知にしておくことが、たいいていの奴隷主たちのねがいなのだ。いままで、私は自分の誕生日がわかる奴隷に出会った記憶がない。……白人の子どもは、自分の年齢を言うことができた。その同じ権利が私には何故うばわれているのか、私にはその理由がわからなかった。……私は、いま二十七歳か二十八歳だろうと

おもう。というのは、一八三五年のあるとき、私がそのとき十七歳ぐらいたと主人が言うのをきいたことがあるからである。」一八四五年に出版された最初の自伝のなかで、ダグラスは自分の生まれた年について、もどかしそうに、間接的な表現で、このように述懐している。⁽¹⁾この叙述では、かれは一八一七年よりは、むしろ一八一八年に生まれたと考えていたということになる。

しかし、それから十年後に書いた二度目の自伝、そして死の数年前に完成した最後の自伝においては、僅かな表現上の相違はあるにしても、かれは、奴隷制度のもとでは奴隷は家族を構成する自由が全くうばわれていたことを強調し、自分の年齢について主人に質問することは、とりもなおさず「不遜のあかし」であるとのべ、それでもその後とも、かれが追求しつづけて知りえた断片的な諸般の状況から、自分の生まれた年を「一八一七年頃」(一度目の自伝)⁽²⁾、「一八一七年二月」(最後の自伝)⁽³⁾と推定して、そう記している。ダグラスの死にかんしては、もちろん、このような曖昧さはない。……

右の文章は、じつは、一九七五年の夏、私をはじめアメリカ合衆国に旅し、ダグラスにゆかりの場所のいくつかを訪ね、また、かの地のすぐれたダグラス研究者と親交を深めて帰国してまもなく、その旅の思い出を綴った旧稿(未発表)の冒頭のくだりである。

そのなかで、あとでふれると書いたダグラスの生年月日を確定する問題については、けっきょく研究史のその段階では、ダグラス自身の推定を越えて歴史的事実として決定できる条件には、いまだちいたっていなかったという事情を、多少、具体的な事例をあげてのべたのが旧稿におけるこの問題についての取扱であった。

しかし、アメリカにおけるその後のダグラス研究の進展と、私自身その間に二回の訪米の機会をえて、いま、旧稿の書きだしを、「一八一八年二月のある日、……」と改めることによって、かれの出生年月を確定し、あわせて母方の事情や若き日のダグラスにかんしても、これまで不明もしくは曖昧だった点について、いくつかの新しい事実をつけくわえることができるようになった。

(1) *Narrative of the Life of Frederick Douglass, an American Slave*, 1845. Reprinted edition with an In-

production by Benjamin Quarles (Harvard University Press, 1960), pp. 23, 24 リプリント版は、このほか各種あり。

(2) *My Bondage and My Freedom*, 1855. Reprinted edition with a New Introduction by Philip S. Foner (Dover Publications, 1969), p. 35. 本書のリプリント版は各種のものがある。

(3) *Life and Times of Frederick Douglass*, 1881. Revised edition, 1892. Reprinted edition with a New Introduction by Rayford W. Logan (Collier-Macmillan, 1962), p. 27.

二

本稿では、ダグラスの出生年の確定の問題に論述を限定するが、この問題にたちいるまゝに、かれの生涯の活動のなかからいくつかを拾いだし、年譜ふうにとまどめてダグラスの全体像を簡単にみておくことは、かれについての知識をあまりもちあわせていない読者にとっては、さしあたり必要なことであろう。⁽⁴⁾

幼少期を祖父母の奴隷小屋ですごしてから、六歳のとき(一八二四年)、ワイ川のほとりのかれの主人の館に

移され、そこでしばらく最初の「奴隷体験」を味わったのち、翌年の

一八二六年 ボルティモアのヒュー・オールドのもとに送られた。

最初は家内奴隷として、その後はかれの工場の下働きとして働く。はじめて読み書きを覚え奴隷こそ学ばなければならぬことを痛感、自学に励んだ。

一八三三年 再びタルボット郡に連れもどされ、トマス・オールドの奴隷となり、野良働きに従事。

すでに奴隷制度に反感を抱いていたため、その危険な根性をたたきなおすよう、翌年の一八三四年、職業的な奴隷仕込人エドワード・コウヴィーのもとに働きにだされた。

あいつぐコウヴィーの残虐な仕打ちについて腕づくで反抗、反対にかれを打負かす挙にだが、この無謀な行為が幸いにもかれを死に追いやるかわりに——じっさい、そのような行為は奴隷制度のもとでは死を意味した——ダグラスに「人間」を自覚させた。「私は、もはや奴隷根性の憶病者ではない。私は、死をおそれない。この精神が、たとえ身はいま

だ奴隷であっても、真実、私を自由な人間にしたのだ。」

一八三八年 一八三六年の逃亡計画に失敗したのち、ポルティモアのトマス・ガードナーの造船所で働きながら自由黒人の集会などに参加していたが、この年ついに北への逃亡に成功(九月三日)。途中、ニューヨークであとからやってきた自由黒人アンナ・マレイと落ちあい結婚(九月十五日)、やがてニューヨークで落着く(九月十八日)。

一八三九年 自由黒人のアフリカ送還に反対するニューベッドフォードの黒人集会ではじめて演説(三月十二日)。

長女ロゼッタ誕生(六月二十四日)。

ガリソン、ウェンデル・フィリップスなどの著名な奴隷制廃止論者の演説をきき、深い感銘をうける。とくにガリソンの演説は、かれの魂を「火のように

燃えあがらせた。」

一八四〇年 長男ルイス・H誕生(十月九日)。

一八四一年 マサチューセッツ州ナンタケットで開かれた奴隷制反対集会で、奴隷としての自己の体験について話すようもとめられ演説、大部分が白人だった聴衆に大きな感動をあたえた(八月十一日〜十二日に三回演説)。「ナンタケット・スピーチ」として知られるこの演説により、以後、職業的な奴隷制廃止運動家の道にふみこむ。

一八四二年 次男フレデリック誕生(三月三日)。

一八四四年 三男チャールズ・R誕生(十月二十一日)。

一八四五年 最初の自伝『フレデリック・ダグラスの奴隷生活体験記』*Narrative of the Life of Frederick Douglass, an American Slave* を公刊。

その後、八月十六日にリヴァプールに向かって出発。一八四七年四月二十日にアメリカに帰ってくるまで、イングランド、スコットランド、アイルランドの各地で、イギリスの同志たちとともに奴隷制廃止運動をはじめ禁酒運動その他の改革運動で活躍。この間にかれらの資金援助をえて、一八四六年十二月十二

日に一五〇ポンド(約七一〇ドル)で「自由」を購入、かつての逃亡奴隷は正式に自由黒人になった。

一八四七年 ニューヨーク州ロチェスターで、ガソリン主義者の反対をおして『北極星』(一八四七～五年) *North Star*——これは一八五一年六月にゲリット・スミスの『リバティー・パーティー・ペーパー』 *Liberly Party Paper* と合して『フレデリック・ダグラス・ペーパー』(一八五一～六〇年) *Frederrick Douglass' Paper* と改称——を発刊(創刊号は十二月三日)。

このためガリソンの強い不興をかい、以後ダグラスとガリソンとは奴隷制廃止論者として異った道を歩むことになる。

一八四八年 はじめてジョン・ブラウンと会う(二月一日)。また、セネカフォールズで開かれた婦人平等権獲得集会(七月十九～二十日)で、ただひとり有力な男性弁士として演説し、女性解放運動においても大きな役割をはたす。

一八四九年 次女アニー誕生(三月二十二日)。

一八五一年 ガリソンとの完全な訣別、ますます政治

行動の重視に傾く。

同時に、この頃「地下鉄道」の「駅長」として多くの奴隷を、より安全な北部の自由州やカナダへ逃亡させた。

一八五二年 大統領選挙で自由党を支持し、ピッツバーグ大会に出席(八月)。

一八五五年 二度目の自伝『奴隷として、自由人として』 *My Bondage and My Freedom* を出版。

一八五八年 『ダグラス・マンズリー・マガジン』(一八五八～六三年) *Douglass' Monthly Magazine* を発刊。

この年、すでにハーバーズフェリー襲撃の想をねっていたジョン・ブラウンを、三週間にわたって自宅で接待(二月)。ダグラスが最後にブラウンに会ったのは、襲撃直前の翌年の八月二十日、ペンシルヴェニア州チェンバースバーグの石切場においてである。

一八五九年 ジョン・ブラウン事件への連座の危険をさけるためフィラデルフィアから逃亡(十月十七日)、カナダを経て再度イギリスへ。翌年の五月、

末娘アニーの死により帰国。

一八六三年前後 南北戦争が勃発すると、ただちにこの戦争を奴隷解放戦争とみ、奴隷制度の打倒に全精力を傾けてきたが、奴隷解放宣言の公布後はとくに黒人の軍隊参加と軍隊内の差別撤廃に大きな役割をはたし、リンカン大統領とも会見した(六三年七月および六四年八月)。

一八六五年以後 戦後は、奴隷身分から解放された黒人の諸権利拡張につとめ、黒人代表団をひきいてジョンソン大統領と会見(六六年二月)、とくに黒人参政権の実現を強く要求した。

その後、一八七二年にロチェスターの自宅焼失を機にワシントンD・Cに移ってから死にいたるまでのダグラスの生活は、黒人の地位向上に献身という一語に要約できるが、そのためのたてとして、たとえばコロンビア特別区の式部官(一八七七年三月にヘイズ大統領により任命)やハイチ共和国の領事(一八八九年七月にハリソン大統領により任命)をつとめるなど、この偉大な人物には不相応な官職にもついた。

一八八二年に妻のアンナ死亡、一八八四年にヘルン・ピッツと再婚。

一八八一年に最後の自伝『フレデリック・ダグラスの生涯と時代』*Life and Times of Frederick Douglass*を出版、死の三年前の一八九二年にはそれを増補改訂した。三回にわたって書かれたかれの自伝は、わが国では一般にあまり知られていないが、ベンジャミン・フランクリンの自伝にも勝るとも劣らぬ価値をもつ。

一八九五年 二月二十日没。その日の夕方、婦人平等権獲得集会での講演をおえてシダーヒルの自宅に帰ってきてまもなく、突如、心臓発作におそわれ、そのまま息をひきとった。享年七十七歳。

遺体は、数日、自宅に安置されたあと、二十五日、メトロポリタン・アフリカン・メソジスト・エビスコバル教会で盛大な葬儀が行なわれた。この日、ワシントンの黒人学校は、いっせいに門を閉ざし、休校することによって弔意を表した。葬儀がおわると、遺体は妻ヘレンと子どもたちの手でロチェスターに運ばれた。いまも、かれはロチェスターのマウン

ト・ホープ墓地で静かに永遠の眠りについている。

ちなみに、一八九五年という年は、アメリカ黒人史上、象徴的な年であった。ダグラスの死の七ヵ月後（九月十八日）に、ブッカー・T・ワシントン（アトランタで、あの有名な「妥協演説」を行なった。また、W・E・B・デュボイスがハーヴァード大学の史学科で、黒人として最初の博士号を取得したのもこの年である。

(4) 以下の年譜において、出典はいっさい省略したが、第四節の *John W. Basingame, Nathan Irwin Huggins, Dickson J. Preston* などの最新の諸研究をも参照して、私なりに作成した。

三

ダグラスにたいする歴史的評価の実証的検討は、かれの死後、約半世紀におよぶ無視と埋没ののち、第二次世界大戦直後の現代黒人解放運動の胎動期に、その理論戦線の一翼として開始されたアメリカ黒人史研究の活発化のなかで、歴史研究の分野に登場した。

一般的な通史としては、すでに確固たる定評がある、

ジョン・ホープ・フランクリンの『奴隷制から自由へ』⁽⁵⁾の初版が一九四七年に出版されたが、その翌年の一九四八年に、多年にわたるダグラス研究の実証的成果の集大成として、ベンジャミン・クオルズがはじめて本格的な研究書『フレデリック・ダグラス』⁽⁶⁾を世に問うた。つづいて一九五〇年には、各巻に詳細な伝記的解説を付した、フィリップ・S・フォーナー編纂のダグラス史料集『フレデリック・ダグラスの生涯と著作集』⁽⁷⁾（全五巻）の最初の二巻が公刊された。（各巻に添えられた伝記的解説は、のちに一冊にまとめられて一九六四年にフォーナーのダグラス伝『フレデリック・ダグラス』⁽⁸⁾として出版された。）

さらに、その翌年の一九五一年に、ハーバート・アブシカーは「アメリカ黒人の最初の三〇〇年の歴史の真髓を黒人みずからの言葉によってしめす」意図のもとに、黒人のみの史料からなる『史料・合衆国における黒人史』⁽⁹⁾（全三巻）の第一巻を刊行し、それから三年後の一九五四年には、ウィリアム・Z・フォスターが、マルクス主義の立場から通史『アメリカ史における黒人人民』⁽¹⁰⁾を公にした。

そして、この年、合衆国最高裁判所は「ブラウン対教育委員会」判決において、公立学校での黒人と白人の隔離を違憲とした歴史的裁定をくだし(五月十七日)、つづいて翌年の一九五五年末から五六年末にかけて、マーティン・ルーサー・キング牧師に率いられたアラバマ州モントゴメリーでのバス・ボイコット運動が成功裡に進展して、現代黒人解放運動は胎動期から始動期に移行し、ここに公民権闘争の幕がきつておとされた。

それとともに、かつての奴隷制廃止運動ならびに十九世紀の黒人公民権闘争の代表的戦士フレデリック・ダグラスが、斯界の注目をあつめるようになった。じじつ、右にあげた諸著作においては、従来の一——そして現在においてさえ——多くの「公平な」アメリカ史のテキスト・ブックが、ほとんどダグラスを無視ないしは軽視しているのとは異なり、フォナーの言葉を借りるならば、「ジェファソンやリンカンと並びおかれて然るべき」正当な位置に、著者たちはかれを据えている。こうして、ダグラスは、アメリカ黒人の歴史の再発見とアメリカ人としての黒人の自己確認のためのたまたかのなかで、その象徴的存在となった。

そうした意味でのダグラス顕彰のひとつの頂点は、一九六〇年代における公民権闘争の最高揚期に、かれの記念切手発行というかたちをとってあらわれた。記念切手を発行するには、それなりの客観的な理由がなくてはならない。ダグラス生誕一五〇年は、まさに絶好の機会であった。

ダグラスにゆかりの地、「北極星」発祥の場所となつたロチェスターを基盤にしたニューヨーク州選出のフランク・ホートン下院議員によって、あの「ワシントン大行進」と同じ一九六三年八月に国会に提出されていたダグラス記念切手発行の議案は、一九六七年二月十四日、同日付の発行初日の消印のあとも鮮かに、壮年期のダグラスの横顔を描いた二十五セント切手として実現した(別掲の縮小図⁽¹¹⁾)。

この生誕一五〇年切手——いまま合衆国各地の郵便局で売られている——の発行によって、ダグラスの出生年月は一八一七年二月、そして生まれた日までが十四日と確定されたかにみえた。⁽¹²⁾ また、その頃、Association for the Study of Afro-American Life and History⁽¹³⁾ が、「黒人史週間」にさいして作成したポスター用の顔写真



FIRST DAY OF ISSUE



にも、かれの生まれは一八一七年二月十四日と印刷されている。

その間の経緯を研究史にてらしてふりかえってみると、この時期までにダグラスについて書かれた書物は、かれの存命中に刊行されたフレデリック・M・ホランドやジエイムズ・M・グレゴリーによるダグラス伝、かれの死後まもなく出版されたチャールズ・W・チエスナット、

ジョン・W・トムブソン、そしてブッカー・T・ワシントンのダグラス伝⁽¹⁵⁾をはじめとし、その後長いあいだの空白を経て、シャーリー・グレハムによって書かれた読みものふうのダグラス伝⁽¹⁶⁾、さらにすでにふれたベンジャミン・クオルズ、フィリップ・S・フォーナーの研究書にいたるまで、また一九七〇年代にはいつて書かれたアーナ・ボンタムの啓蒙的なダグラス伝⁽¹⁷⁾において

も、ダグラスの出生にかんする叙述は、すべてダグラス自身が自伝のなかでのべていることに、適宜、依拠している。というよりは、クオルズリフォーナー段階においてさえ、この点については依拠できるそれ以外の史料がなかったのである。

したがって、歴史家としてあくまでも実証を重んじるクオルズは、さきの書物の第一章の見出しと本文とのあいだに、「読者は、私が私の家族について多くを語ることを期待してはいけない。奴隷のあいだでは家系樹(系図)は育たない」というダグラス自身の言葉を小活字で挿入して、かれの生まれを「一八一七年のある月」と、本文を書きださざるをえなかったのである。⁽¹⁸⁾この点、フォーナーの場合も、クオルズの手法に準じている。フォーナーは、かつてダグラスが、いつ生まれたかを質問されたとき、かれが答えた返事、すなわち、「私には(その質問に)答えることができない。私は自分の年齢を知らない。奴隷に家族の記録はない」というダグラス自身の言葉をもって、第一章の書きだしの筆をおこし、かれの生まれを「一八一七年二月」として⁽¹⁹⁾いる。

また、無視されてきたとはいえ、ダグラスを記載した、

これまでに出版された各種の辞(事)典、黒人年鑑やガイドブックなどにおいても、私の知るかぎり、やはりかれの生まれはすべて一八一七年と記されている。⁽²⁰⁾

歴史研究におけるこうした状況は、当然、ダグラス顕彰のさまざまな場で見うけられる。たとえば、ロチェスターのハイランド・パークやボルティモアのモーガン州立大学のキャンパスに建てられたダグラス像、ワシントンのハーワード大学内にあるかれの名を冠したメモリアル・ホール、また同じワシントンのかつてのダグラスの住いを保存した二つのダグラス記念館等々……で目にするかれの生没年は、いずれも一八一七〜一八九五年である。こうして、生まれた日はともかく、出生年月にかんしては、客観的な史料を欠いたまま、ダグラス自身の推定による「一八一七年二月」が、ひろく定着してしまっただけというのが最近までの実状である。

- (5) John Hope Franklin, *From Slavery to Freedom: a History of American Negroes*, 1947. 本書はその後、度々、増補改訂られて第二版が一九五六年、第三版が一九六七年、第四版が一九七四年、そして第五版が一九八〇年にそれぞれ出版されて現在にいたっている。なお、第三版からは副題が *A History of Negro Americans* と改めら

れた。

また、本書の日本語版、井出義光・木内信敬・猿谷要・中川文雄訳『アメリカ黒人の歴史——奴隷から自由へ』(研究社、一九七八年)は、第四版からの翻訳である。

- (6) Benjamin Quarles, *Frederick Douglass*, 1948. 本書のものは、かれの博士論文である。

- (7) Philip S. Foner, ed., *The Life and Writings of Frederick Douglass*, Vol. 1, Vol. 2, 1950; Vol. 3, 1952; Vol. 4, 1955; Vol. 5, 1975. 第一巻を入手してまもなく、私は紹介の一文を書いた。拙稿「フレデリック・ダグラスの生涯と著作集によせて」(『経済研究』第四巻第四号、一九五三年)。

フォーナーは、また右の著作集とは別に、ダグラスの婦人権問題にかんするものだけを一冊にまとめて出版している。Foner, ed., *Frederick Douglass on Women's Rights*, 1976.

- (8) Philip S. Foner, *Frederick Douglass*, 1964.

- (9) Herbert Aptheker, *A Documentary History of the Negro People in the United States*, 1951; Vol. 2, 1973, Vol. 3, 1974.

- (10) William Z. Foster, *The Negro People in American History*, 1954. 本書の日本語版は、貫名美隆訳『黒人の歴史——アメリカの史のなかのニグロ人民』(大月書店、一九七〇年)。

(11) "150th Anniversary of Birthday of Frederick Douglass" in *Congressional Record* (Proceedings and Debates of the 90th Congress, First Session.)

(12) 生まれた日にかんしては、確たる証拠はなにもなく。

一九七五年に私をはじめとするオオノス教授に会ったとき、そのときにあつた録音テープのなかで、この点にかんして、かれは、口頭語「フス」で、Douglass only said that he was born on Valentine's Day because he did not know what day he was born on. He did not even know what year he was born in. His mother died when he was very young and the only thing he remembered about his mother was that she had referred to him as her "Valentine", and because she referred to him as her "Valentine", he arbitrarily took Valentine's Day, February 14 to be his birthday. (この点から、教授は、右の引用にあつて、ダグラスは自分の出生年さえ知らなかったとのべているが、すでにあげられた一九四八年の研究書(注(6))では、このあとすべのべるマツに、慎重な筆の運びで「一八一七年」と書してゐる。しかし、これまたすでにあげられた一九六〇年のリプリント版の最初のダグラス自伝(注(1))のなかで、教授が作成している略年譜では「一八一七七年」と記しているし、さらに一九六八年に Prentice-Hall, Inc から出版した著作の Quares, ed., *Frederick Douglass* のなかでも、これと同じ略年譜

を再録してゐる。)

十四日誕生説が確たる証拠をもつてはななく、ダグラスの母がかれを「私のヴァレンタイン」と呼んだと知られる記憶によつて、ダグラスが「勝手に」つくりだしたものであるとの七年前のクオオノスの談話は、あつてのべるジャクソン・J・フレステンによる最新のダグラス研究書(注(2))のなかでのかれの叙述と、基本的に一致してゐる。むしろ、フレステンは、個人的にクオオノスから宗峻をえたのではなかつた、私にはおぼわれる。この点にかんしては、口頭語「フス」で。As for the precise date of February 14 on which his family celebrated his birthday, that was an arbitrarily chosen date, based purely on sentiment. Douglass recalled that his mother, on her last visit to him, had called him her "Valentine" and had given him a heart-shaped ginger cake. Knowing he had born in February, he decided it might have been a birthday visit. So he permitted family and friends to do their celebrating on St. Valentine's day, February 14. (Dickson J. Preston, *Young Frederick Douglass: the Maryland Years*, 1980, p. 34.)

(13) 一九一五年にカーター・G・ワッドソン(一八七五—一九五〇年)によつて創設された、この研究組織によつては、拙稿「アメリカ黒人生活・歴史研究会第六一回年次大会に参加して」(『歴史学研究』第四四二号、一九七七年)

を参照。

- (14) Frederick May Holland, *Frederick Douglass: Colored Orator*, 1891.
- James M. Gregory, *Frederick Douglass: the Orator*, 1893.
- (15) Charles Waddel Chesnut, *Frederick Douglass*, 1899.
- John W. Thompson, *An Authentic History of the Douglass Monument*, 1903.
- Booker T. Washington, *Frederick Douglass*, 1907.
- 本書は *American Crisis Biography* 双書の一冊であるが、その中で、フレドネスに於ける執筆が予定されたものや、マニングが自分な書くと画した。(その結果、フレドネスはマニングをばなべ、マニングはマニングと書した。)しかし、マニングはこれを主として、マニング・ウィリアムズに代筆させ、それに自分が修正加筆して書きあがったものだとおわればなる。ごまかしたマニング派のタヌキもなせぬ。
- (19) Shirley Graham, *There Was Once a Slave*, 1947.
- (17) Arna Bontemps, *Free At Last: the Life of Frederick Douglass*, 1971.
- (18) Quarles, *Frederick Douglass*, 1948; Athenaeum edition, 1968, p. 1.
- (16) Foner, *Frederick Douglass*, 1964, p. 15.
- (20) 以下、身近かなといひで、私が無作為にあたったもの

だけを列举する (a は数冊からなるもの、b は一冊のもの、c は一冊のもの、黒人年鑑やガイドブック類)。

- a. *Encyclopaedia Britannica*; *Encyclopaedia Americana*; Harper's *Encyclopaedia of the United States History*; *ACLS, Dictionary of American Biography*; *Encyclopaedia of the Social Sciences*; McGraw-Hill's *Encyclopaedia of World Biography*.
- b. Thomas H. Johnson, *The Oxford Companion to American History*, 1966; *Webster's American Biographies*, 1975; Richard B. Morris, *Encyclopedia of American History, Bicentennial Edition*, 1976; Chamber's *Encyclopaedia*, 1967; David C. Roller, Robert W. Twyman, *Encyclopedia of Southern History*, 1979; Wilhelmena S. Robinson, *Historical Negro Biographies*, 1967.
- c. Ploski and Brown, *The Negro Almanac*, 1967; Peter M. Bergman, *The Chronological History of the Negro in America*, 1969; Alton Hornsby, Jr., *The Black America*, 1977; NAACP, *A Guide to Facts About the Negro*; Irvin J. Sloan, *The Blacks in America, a Chronology and Fact Book*, 1977.
- わが国の辞典では、岩波『西洋人名辞典』(一九五六年、増補改訂版一九八一年)、学研『新世紀大辞典』(一九六八年)、小学館『ランダムハウス英和大辞典』(一九七九年)、研究社『新英和大辞典』第五版(一九八〇年)、岩波『新

英和辞典』(一九八一年)。

四

ところが、最近、ダグラスの出生にかんして、簡略だが重要なひとつの新資料が発掘された。この新資料の発見は、現在、その第一巻がイェール大学出版会から刊行されている、ジョン・W・ブラシントン編集責任者とする『フレデリック・ダグラス・ペーパーズ』の編纂プロジェクトと重なりあっている。

このプロジェクトは、一九六〇年代末から合衆国の各地において、大学をはじめとする各種の教育・研究機関で澎湃とわきおこった、いわゆる「ブラック・スタディーズ運動」の高まりと展開を一般的背景として、すでに述べたダグラス顕彰を真に学問的レベルで遂行し、かれの正当な歴史的評価を確立することの重要性が認識された結果、National Historical Publications and Records Commission が、その頃 Association for the Study of Afro-American Life and History の専務理事をしていたチャールズ・ウェズリーと協議したすえ、一九七〇年五月に、合衆国内のみならず世界各地に散逸している歴

大な量のダグラス関係資料を収集、編纂して公刊することは「とりわけ重要かつ急務」であるとの委員会決定をみたことに端を発している。

この決定にもとづき、プロジェクトの担当責任者として白羽の矢をたてられたのが、すでに将来を嘱望されていた当時まだ三十歳そこそこの新鋭の歴史家だったブラシントンであった。「チャールズ・ウェズリー氏から、私が編集責任を引き受けるよう依頼されたのは、たしか一九七一年はじめだったとおもう。……私は、長期にわたるこの大計画に必然的にもなう資金面その他の諸困難を十分に承知していたので、さいしょはしぶんためらったが、けっきょく受諾した」と、かれはその頃のことをふりかえって、こう語っている。その後、さらに二年余におよぶ多くの関係専門家の慎重な討議を経て、一九七三年九月、National Endowment for the Humanities, Yale University, National Historical Publications and Records Commission の三者にょって設置されたフレデリック・ダグラス・ペーパーズ・プロジェクトが正式に発足した。⁽²²⁾

すでにふれたように、『フレデリック・ダグラス・ペ

「パーズ」(以下、『ペーパーズ』と略す)は、第一巻が一九七九年に出版されたが、その全体構想と完成までの見透しは、なお多くの不確定部分を残しながら、およそ次のように計画されている。まず『ペーパーズ』の全体は、大きく三つのシリーズ、すなわち、(1) 演説・討論・インタヴュー、(2) 『解放者』や『北極星』をはじめとする各種の奴隷制反対の新聞類に発表された論説や評論、(3) 各種の書簡、の三部から構成されており、この順序にしたがって各シリーズ別に(第一シリーズは四と五冊、第二シリーズは三と四冊、第三シリーズは多くて七冊)出版が予定されている。なお、ダグラスの自伝を加えるかどうかは、今後の進行過程で検討されるはずである。このようなシリーズ別の発行順序にはいくつかの理由があるが、最大の理由は資料収集の難易度に関係している。

ここでは、『ペーパーズ』の紹介が主たる目的ではないので、詳しくその内容について説明することはしないが、第一巻を一瞥して誰でも気がつくことは、収集された膨大な資料のなかから綿密な史料的価値の検討と吟味を経て精選された収録史料、そして、こうして収録され

た各史料に付された適確な解説、ならびに詳細をきわめた脚注である。ブラッシングゲームによる適切な二種類の英文のイントロダクションが本書の学問的な価値をいっそう高めていることはたしかだが、それ以上に重要なことは、かれを責任者としたプロジェクト・チームの精力的な努力はいうまでもないことながら、これを支えた全国的、いや国際的規模のそれこそ数えきれないほど多くの人びとの協力による共同作業が、この労作を可能にしたということである。

ダグラスの出生年にかんする新資料の発掘も、こうした作業過程でうみだされた最も貴重な成果のひとつであった。そして、この新資料発見の直接的栄誉は、ダグラスの生地に近いイーストン(タルボット郡庁所在地)の地方史家、ディクソン・J・プレストンに属する⁽²³⁾。

すでに、三十年以上も新聞の仕事に従事しながら、タルボット郡を中心とするメリランド史の研究に取り組んできたプレストンが、アナポリス(州都)の古文書館所蔵の史資料のなかから、手書きの『アンソニー家文書』を探しだし、そのなかからダグラスの最初の所有者だったエアロン・アンソニーが所有した黒人奴隷の出生年目

My Black People Ages

Betts was Born May.....1774	Died 1849
(中略)	
Hariott daughter of Betts Born Feby 28.....1792	
(中略)	
Perry Sun of Hariott Born Jany.....1813	
Jerry Sun of Cate Born Aprl... ..1813	
Sarah daughter Hariott Born Augt.....1814	
Tom Sun of Milly Born Sept 21.....1814	
Cate daughter of Betts Born Jany.....1815	died 1815
Phill Son of Cate Born Aprl.....1815	
Eliza daughter of Hariott Born March.....1816	
Prissey daughter of Betts Born Augt 15.....	1816
Henny daughter of Milly Born Sept 2d.....	1816
Mary daughter of Jainny Born Feby	1818
Frederick Augustus Son of Harriott Feby... ..	1818
James Son of Cate Born May 27	1819 dead
Nancy Daughter of Milly Born July	1819
Isaac Son of Jinney Born Augt 27.....	1819
Henry Son of old Betts Born Feby.....	1820
Kitty Daughter of Harnott Born March 7.....	1820
Stephen Son of young Betts Born July. ...	1819
John Son of Jinney Born June.....	1821 dead
Dealey Daughter of young Betts Born June... ..	1821 dead
Charlott Daughter of Arraanna Born Decem....	1821 dead
William Son of Cate Born Feb 17.....	1822
Arianna daughter of Harriott Born Octr 1822.....	1822

録を発見したからである。この手書きの出生年目録は、エアロン・アンソニーの筆になるものではなく、誰か(名前不詳)があとで書き加えたものだが、発見されるただちにクオルズやブラシンゲイムなどの関係専門家とのあいだで厳密な検討と吟味が行なわれた結果、ダグラ

スの出生にかんし十分に信憑性があり、史料価値をもつものと認定された。⁽²⁴⁾

《私の黒人たちの年齢》“My Black People Ages”と標記されたこの目録のなかで、ダグラスの出生と直接にかかわりをもつ部分は、別表の通りである。⁽²⁵⁾(兄のペリ

ー誕生から末の妹のアリアンナ誕生まで。なお、第一行目のベッツ〔正しくはベッツィー〕はダグラスの祖母で、一七七四年に生まれ、一八四九年に死んだ。彼女にかんする史料部分の多くは割愛したが、三人の息子と九人の娘のみんで十二人の子どもを産んだ。⁽²⁶⁾第二行目のハリオット〔正しくはハリエット〕がダグラスの母で、ベッツィーの第二子である。)

みられるように、一八一八年のところに、「ハリオット

〔正しくはハリエット〕の息子フレデリック・オガスタス二月」"Frederick Augustus Son of Harriott Foby"と記されている。ただし、残念なことに生まれた日は記入されていない。(ハリエットから生まれたダグラスの姉妹五人のなかで、生まれた日が記されているのは、一八二〇年生まれのすぐ下の妹キティーだけである。)

この新史料の意義について、『ペーパーズ』第一巻の序文の冒頭で、ブラッシングゲームは、次のようにのべている。「アメリカ史において、一八一八年は重要な年である。国会が合衆国の国旗の現在の図柄を採択し、チャールズ・バルフィンチが(ベンジャミン・H・ラトローグのあとを引継いで——引用者)国会議事堂の建設に着手し、最初の年金法が国会を通過し、またイリノイ州が自由州として連邦に加盟したのも一八一八年であった。そして、この同じ年の二月のある日、メリランド州タルボット郡のエアロン・アンソニー船長⁽²⁷⁾所有の二十六歳の奴隷、ハリエット・ベイリーがフレデリック・オガスタスという男の子を出産した。アンソニーは《私の黒人たちの年齢》と標記された目録のなかで、ごく簡略な事項しか記入していないが、これによって歴史家はのちにフレ

デリック・ダグラスとして世界に知られたることになる人物を、はじめて(傍点は引用者)かいまみることができ⁽²⁸⁾る」と。

また、『ペーパーズ』第一巻より約半年遅れて『フレデリック・ダグラス——奴隷と市民』を出版したネイサン・I・ハギンスは、巻末の参考文献案内のなかで、「ジョン・W・ブラッシングゲーム編纂の『フレデリック・ダグラス・ペーパーズ』が、現在、イェール大学出版会から刊行されている。その第一巻は一九七九年に出版予定であったが、本書(ハギンスの書物——引用者)が印刷に付されたときには、まだ発行されるにいたっていなかった」とのべ、つづいて「メリランド州タルボット郡のブランテーションや郡の諸記録にかんする、ディクソン・J・プレストン氏の骨の折れる調査によって、幼少期のフレデリック・ダグラスとその家族について沢山の新しい情報があきらかになった。なかでも、とりわけ重要なことは、ダグラスの出生年がかれ自身が考えていた一八一七年ではなくて一八一八年であったということわれわれが、はじめて(傍点は引用者)確信できたことである。プレストン氏は、これらの史資料にもとづいて、

現在、書物を執筆中であり、それは一九八一年に出版されるはずである。⁽²⁹⁾

ブラシengeイムやハギンスのこれらの客観的な叙述のなかに、私は、ダグラス自身が生涯をかけて追求してはたしえず、また、今年でダグラスの一生よりも一歳年上になる七十八歳のクオルズが、この年までなんとか確定しようとする努力してやまなかったダグラスの出生年を、以上のべてきたような経緯を経て、いま、ようやく歴史的、事実としてあきらかにすることができたことにたいする、黒人歴史家としての自負と感慨がこめられているような気がする。それと同時に——個人的な書きかたを許していただけるならば——一昨年（一九八〇年）の盛夏、イェール大学の『ペーパーズ』編纂所で一ヵ月を過ごしてから、ダーラムのフランクリン教授のもとへ向う途中、ポルティモアのお宅でクオルズ教授に久々にお目にかかってこの問題について意見をもとめたとき、あの温和な教授のまなざしの底にきらりと光った一条の喜びの色とともに、「ダグラス死後、八十年余にしてようやく……」と鋭く言いきった厳しい口調が、ありありとおもいだされる。

それは、どこにでもある過去のたんなる小さな事実の発掘ではない。また、ダグラス個人だけにかかわる問題でもない。それは、白人優越主義と黒人蔑視の人種的偏見のもとで、長年にわたって、無視と歪曲によって描かれてきたアメリカ黒人の歴史を、真に科学的な事実にもとづく歴史たらしめようとして、鋭意、研鑽をかさねてきた多くの黒人歴史家と良心的な白人歴史家のたゆまない努力の結実を、象徴的にしめしている。さらに、それは、かつての黒人奴隷制度とその後こんにちにいたる黒人差別制度の重圧のもとで、ひたすら黒人であることと、アメリカ人であることとの統一的存在としてのアイデンティティをもとめて、一貫してたたかいつづけてきた三五〇年以上におよぶアメリカ黒人の歴史的实践とわがちがたく結びついていたからこそ、すぐれて歴史研究の課題たりえたのである。

そういう意味で、ダグラスの出生年の確定の問題は、アメリカ黒人全体の問題であるばかりでなく、すべてのアメリカ人の問題、つまりアメリカ民主主義の根幹にかかわる問題であったといえる。

ロチェスターのマウント・ホープ墓地にあるダグラスの墓石に刻まれたかれの生没年は、いまでも奇妙な状況を呈している。垂直に建てられた墓石の正面には一八一七―一八九五年となつてゐるのに、その前に水平に置かれた墓石には一八一八―一八九五年と刻まれていて、生まれた年にかんして二通りの数字がみうけられるのである。やがて、この墓石も、一八一八―一八九五年と同一に刻みかえられる日がくるのであろうか。⁽²⁰⁾

(21) 以下の叙述は、John W. Blassingame, ed., *The Frederick Douglass Papers*, Vol. 1, 1979. のなかのフラインゲイムの序文、ならびに一九七七年と一九八〇年の二回にわたつて、私がかれから聞きとりをした録音テープに依拠してゐる。

(22) 『フレデリック・ダグラス・ニューボース』の発足時の編纂顧問には、黒人・白人からなる次のような「そつそつたる歴史家十八名が名前を連ねてゐる。

David B. Davis, Carl Degler, Helen G. Edmunds, Philip S. Foner, John Hope Franklin, Louis R. Harlan, Howard Lamar, Elsie M. Lewis, Rayford W. Logan, Augustus Low, Dorothy Porter, Benjamin Quarles, George Shepperson, Clare Taylor, Howard Temperley, George B. Tindall, Charles H. Wesley, C. Vann Woodward.

(23) Dickson J. Preston, *Young Frederick Douglass: the Maryland Years*, 1980.

(24) この点にかんし、フレステン自身は、次のやうに云つてゐる。Taken by itself, this record is persuasive but not conclusive. It is not in Arron Anthony's handwriting: apparently it was inserted at a later date by a person unknown. But an 1818 birth date is consistent with known facts about Frederick's early life. (*idem*, pp. 31, 32.)

(25) 手書きのこの原史料は、活字化されたものは、まだその書物にも収録されてゐない。私はそのロビーをメラミンゲイム教授から貰つたが、ロビーの不鮮明な箇所や自分では解読できない部分もあったので、私を書きうつしたものを知人のアーキヴィストに点検してもらい、タイプしてもらった。みられるやうに Son が Sun と書かれていたり、Daughter と daughter の不統一などもあるが、原史料をそのまゝ活字化したものである。

Anthony Family Papers, Ledger A, folder 95, Dodge Collection, Maryland Hall of Records, Annapolis

(26) *My Bondage and My Freedom*, p. 38. *Life and Times of Frederick Douglass*, p. 28. *Frederick Douglass*, p. 15. *Philip S. Foner*, *Frederick Douglass*, p. 15. 一八九〇年に出版され

た最新のダグラス伝 Nathan Irvin Huggins, *Frederick Douglass: Slave and Citizen*, p. 4 にきついで同様である。

- (27) 一七六七年に貧農の子として生まれたアンソニーは、一八二六年に死んだときには三つの農場と三十人の奴隷をもつ奴隷所有者になりあがっていたが、一七九七年以降は同時に、当時アメリカでも屈指の大プランター・エドワード・ロイド(ワイ川のロイド家として知られる名家の五代目で、かれの館は「ワイ・ハウス」とよばれた)の十三の農場の総監督をやっていた。それ以前の約二年間、かれはロイド所有の豪華帆船「エリザベス・アンド・アン」号の船長をとめていた。以後、かれはキャプテン・エフロン・アンソニーとよばれるようになった。Blassingame, ed., *The Frederick Douglass Papers*, Vol. 1, p. 30, footnote 6.; Preston, *Young Frederick Douglass*, p. 25.
- (28) Blassingame, ed., *Douglass papers*, Vol. 1, p. xi.
- (29) Nathan Irvin Huggins, *Frederick Douglass: Slave and Citizen*, 1980, p. 181. くだりながら「ンギンヌは」

プレストンの書物が一九八一年に出版されるはずであると書いているが、すでに(注(23))で記載したとおり、それは一九八〇年末に出版された。

- (30) 拙稿「フレデリック・ダグラスの墓」(『歴史評論』第三七三号、一九八一年)。

〔補注〕『フレデリック・ダグラス・ペーパーズ』出版のその後の進捗は、当初の予定よりかなり遅れている。計画どおりであれば、すでに第二巻が出ているはずであったが、本稿を書き終えた直後にクオルズ教授からいただいた手紙によれば、一九八二年一月現在、第二巻はなお校正中で、第三巻の原稿がようやくイェール大学出版会の手に入り、目下、第四巻の原稿作成にブラランゲイム教授はじめスタッフ一同が取り組んでいるとのことである。

したがって、今後、事態が順調にすすめば、第二巻は今年の夏、秋、また第三巻は本年末、来年初めに出版が期待されている。

(一橋大学教授)